

## 近畿方言話者における母音の無声化—言語意識と言語選択—

邊姫京 (国際教養大学)  
byun@aiu.ac.jp

### 1. はじめに

近畿方言における無声化生起率は、東京方言のそれに比べるとかなり低い(杉藤 1988, 藤本・桐谷 2003, 安田・林 2011, 邊 2010, 2012 など), 近畿方言の中でも世代の差があり, 若年層の無声化生起率は中年層, 高年層のそれより高い(邊 2010, 2011, 2012).

近畿方言の若年層における無声化生起率の増加は, 共通語化の影響と見られるが, 共通語の普及により地域によっては方言が話せない若者も増えている. 方言が話されている地域では相手や場面により方言と共通語を使い分けているとされるが, 若者の場合, 調査時に話されたことばが使い分けられた共通語なのか, 完全に置き替えられた共通語なのか判断が難しいときがある.

安田・林 (2011) は, 20-30 歳代の近畿方言話者 10 名に, 単語 (大学生, 美しい, 包む, 季節, 深い, 寿司, 飛行機, 子孫, 少し, 二人, 敷く, の 11 語) と, 文章 (上記の 11 語を含む文章) を読ませ, 無声化生起率を調べている. 平均無声化生起率は, 単語と文章の順に, 東京方言話者は 80%, 92%, 近畿方言話者は 24%, 73% で, 単独発話において東京方言と近畿方言の差が大きい. 単独発話のほうが文章よりも丁寧に読まれる傾向はあり, それが無声化生起率に影響した可能性もあるが, 主な要因は音環境と音調にあると思われる. 音環境は, 近畿方言に限らず全国的に摩擦音に挟まれた狭母音はそれ以外の環境に比べて無声化が相対的に起こりにくい(邊 2012), 上記の 11 語のうち 2 語がそうである. 音調は, 上記の 11 語を京阪式アクセントで読むと無声化拍の音調が H, 後続拍の音調が L になる語が 5 語もある. 近畿方言の若年層において無声化拍と後続拍の音調が HL の場合は LL, LH, HH の場合より無声化が有意に起こりにくく(邊 2011), 音調の影響で無声化生起率がさらに低くなったと思われる. 音調が HL であったとすれば, 話者は共通語ではなく方言で読んだことになるが, 論文には収録時の指示内容についての言及がないので, 話者が共通語と方言のどちらで読んだかは不明である.

そこで本稿では, 具体的な指示を与えて単語と文章を読んでもらい, 方言と共通語とで無声化生起率にどの程度の差があるかを調べた. 方言で読む単語の単独発話は, 前後の子音, 母音の種類など音環境をそろえた. また, 京阪式アクセントで無声化拍と後続拍の音調が HL にならない語を選び, アクセントによる無声化生起率への影響を最小限にした. 加えて, 話者の言語意識を知るために, 特定の場面で関西弁と共通語のどちらを使うかを問うアンケートを実施した.

さて, 近畿方言における無声化生起率の世代差は, その結果が今後も持続する通時的変化 (diachronic change) と見られるが, 共時データに見られる世代差を通時的変化と見るに

は、二時点以上の調査結果を比較し、同一コーホート (cohort) において無声化生起率に変化がないことを確認する必要がある。一時点の調査で観察される世代差から通時的変化を推定する見かけの時間 (apparent time) の推定法は、通時的変化を成長に伴いことばが変化するエイジ・グレイディング (age-grading) と見誤る恐れがあり、エイジ・グレイディングの可能性を排除する必要があるからである。二時点以上の調査結果を比較し、値に変化がなければ通時的変化、変化があればエイジ・グレイディングと解釈できる。

本稿の目的は二つある。一つは、近畿方言の若者において無声化生起率が東京方言に比べて低いことが、無声化を習得していないことに起因するのか、あるいは習得しているが意図して無声化せずに発話していることに起因するのかを、言語意識と関連して探ることである。もう一つは、1990年代生まれの話者の無声化生起率が、10年前に同地域、同方言話者を対象に行った結果 (邊 2012) と比較して差があるかを調べることである。

## 2. 手順

### 2.1. 話者と音声収録

話者は、大阪または兵庫で生まれ育った男女 23 名である (男性 3 名, 女性 20 名, 1990-1997 年生まれ)。音声収録は、2017 年 1 月に神戸大学内で行われた。

### 2.2. 音声資料

音声資料は、単独発話 (単語リスト) と文章 (朗読文) の 2 種類である。表 1 に単語発話 36 語の音環境を示す。下線の拍が無声化拍である。各セルは、無声化拍の母音が上段: /i/, 下段: /u/, 後続拍の母音が左側: 非狭母音/a/または/e/, 右側: 狭母音/i/または/u/である。後続子音が破裂音の場合は、後続母音が狭母音のみで非狭母音はない。音声収録の際は、無声化が起こらない環境の語をダミーとして入れ、計 76 語をランダムに並べた単語リストを使用した。単語リストの上段には「1 つずつ区切って、普通の速さで、地元で家族や親しい友人に話すように自然に読んで下さい」という指示文があり、同様の内容を口頭でも説明した。

語アクセントは主に『京阪系アクセント辞典』(中井幸比古編 2002, 勉誠出版)を参照したが、『全国アクセント辞典』(平山輝男編 1960, 東京堂)も参考にした。無声化拍と後続拍の音調が HL になる語を避け、LH, HH, LL になる語を選んだが、話者によっては HL で発話する例もある。

表 1: 単語発話の音環境

後続 先行	破裂音		破擦音		摩擦音	
破裂音	きたかみ(北上) くけい(矩形)	ききめ(効き目) くくる(括る)	あきち(空き地) くちびる(唇)	きつね(狐) たいぶつ(退屈)	きせい(既成) くさり(鎖)	きすぎる(着過ぎる) くすり(薬)
破擦音	ちかく(近く) おつかい(お使い)	ちくわ(竹輪) つきあい	ちち(父) つち(槌)	ちつじょ(秩序) いつつ(五つ)	ごちそう(御馳走) あつさあたり	ちしりょう(致死量) うつし(写し)
摩擦音	しかい(市会) ふたご(双子)	いしき(意識) いふく(衣服)	しちご(七五) スチーム	しつもん(質問) ふつう(普通)	しさつ(視察) ふせい(不正)	ししまい(獅子舞) ふしぎ(不思議)

朗読用の文章は「これは、私が小さいときに、村の茂平というおじいさんからきいたお話です」から始まる『ごん狐』（新美南吉作）の冒頭 16 文である。表 2 に分析対象になる語の音環境を示す。該当する語がないセルは空白になっている。下線の拍が無声化拍である。無声化拍が連続する「すすき」は 2 回登場する。表 2 は語中の 29 語で、他に文末の「です」「ます」が 4 回、「でした」「ました」が 12 回登場し、分析したのは計 45 語である。音声収録の際は「学校で朗読するつもりで読んでください」と口頭で指示を出した。語アクセントは話者によって東京式になる場合も京阪式になる場合もあるが、そのまま分析した。

表 2: 朗読文の音環境

後続 先行	破裂音	破擦音	摩擦音
破裂音	出られな <u>く</u> て、 <u>ま</u> て	南吉(なん <u>き</u> ち)、 <u>ま</u> つね	ひや <u>く</u> しょう(百姓)、 <u>く</u> さ
破擦音	ち <u>か</u> く、 <u>つ</u> けたり、 <u>つ</u> かる、見 <u>つ</u> からない	<u>つ</u> つみ(堤)	
摩擦音	わたしたち、 <u>す</u> こし、 <u>ひ</u> と <u>り</u> 、 <u>そ</u> して、 <u>ち</u> ら <u>し</u> たり、 <u>ほ</u> して、 <u>つ</u> るして、 <u>ほ</u> つとして、 <u>ひ</u> か <u>つ</u> て、 <u>す</u> く <u>な</u> い、 <u>増</u> して、 <u>ふ</u> と、 <u>ひ</u> と、 <u>ふ</u> かい、 <u>す</u> ず <u>き</u> 1、 <u>す</u> ず <u>き</u> 2		<u>す</u> ず <u>き</u> 1、 <u>す</u> ず <u>き</u> 2

### 2.3. 言語意識に関するアンケート

音声収録の前に、A から F について「次の状況であなたが使用するのは関西弁と東京弁のどちらですか？」を尋ねるアンケートを実施した。アンケート用紙には「どちらかに○をしてください。両方の場合は両方に○をしてください。」という指示文がある。

- A 家族と話すとき
- B 学校で（関西出身の）友人と話すとき
- C 学校で（関東出身の）友人と話すとき
- D みんなの前でプレゼンをするとき
- E 知らない人に東京弁で声をかけられたとき
- F NHK に出演してインタビューを受けるとき

### 2.4. 分析

収録した音声は音響分析ソフトを用いて無声化の有無を判断した。音声波形に周期的な波形が現れず、広帯域スペクトログラム上にも声帯音源パルスが現れない場合を無声化母音とし、その母音の割合を求め無声化生起率とした（邊 2011）。無声化生起率は個人ごとに算出した。単独発話は、無声化拍と後続拍の音調が HL かどうかを、筆者が聴覚判断した。

## 3. 結果

### 3.1. 無声化生起率

結果を単独発話・文章、音環境の順に提示する。話者のほとんどが女性なので男女は分けない。大阪と兵庫とで有意差は見られないので ( $t(21)=0.2554, p=0.8009$ ) 地域も分けない。

図 1 に単独発話（方言バージョン）と文章（共通語バージョン）の結果を箱ひげ図で示す。箱内の太線は中央値、図下の有効数は話者数である。無声化生起率の平均は、左から「単独・語中」41%、「文章・語中」78%、「文章・文末」100%である。文末は 16 語すべてが無声化しているので図 1 では中央値の 100%のみ表示されている。単独発話と文章の語中に対して、対応のある t 検定を行った結果は、文章のほうが単独発話より有意に無声化生

起率が高い ( $t(22)=11, p<0.0001$ ).

本稿と安田・林 (2011) の結果を平均で比較すると、「文章・語中」は、安田・林が 73%，本稿が 78% で非常に近い。「単独・語中」は安田・林が 24%，本稿が 41% で本稿のほうが高い。前述したように、安田・林 (2011) の調査語には東京式アクセントで発話された場合は無声化が起りやすいが、京阪式アクセントで発話された場合は無声化が起りにくい語が多数含まれている。そのため本稿よりも無声化生起率が低くなったと思われる。

本稿の単独発話 828 例 (23 名×36 語) のうち、無声化拍と後続拍の音調が HL で発話された語は 79 例で、うち 3 例が無声化し、音調が HL の場合の無声化生起率は 4% である。これに対して無声化拍と後続拍の音調が HH, LL, LH の場合の無声化生起率は 45% である (749 例のうち 334 例が無声化)。イエーツの補正を用いたカイ二乗検定を行った結果は、音調が HL の場合はそれ以外の場合より無声化生起率が有意に低い ( $\chi^2(1) = 47.6, p < 0.0001$ )。

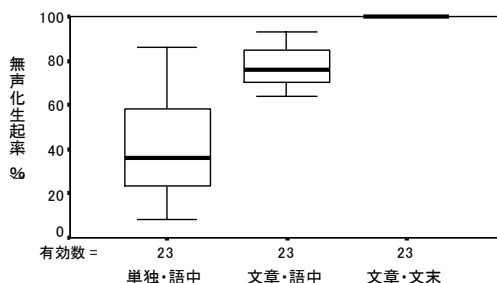


図 1: 単独発話(方言)と文章(共通語)の無声化生起率

音環境のうち子音別、母音別結果は紙幅の都合により省略し、前後子音別結果のみ提示する。図 2 に前後子音別結果を示す。右側の「文章」は、破擦音-摩擦音、摩擦音-破擦音に該当する語がないためグラフは表示されていない。単独発話と文章のいずれも前後子音が摩擦音の場合は無声化生起率が極めて低い。単独発話で破擦音-閉鎖音、摩擦音-破擦音、摩擦音-閉鎖音の無声化生起率が相対的に高いのは、邊 (2012) と同じ結果である。

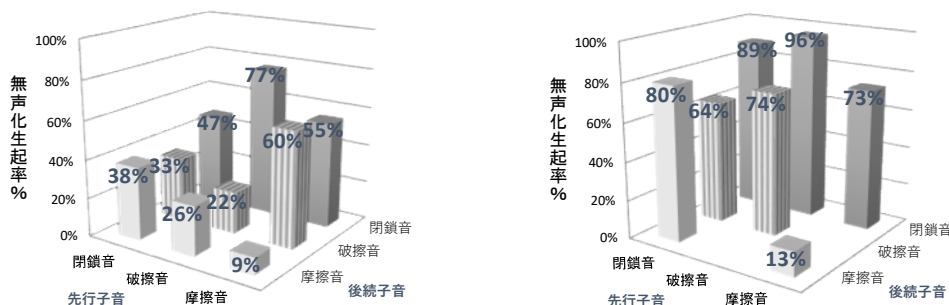


図 2: 単独発話(左)と文章(右)の前後子音別無声化生起率

### 3.2. 言語意識

図 3 に特定の場面で関西弁または東京弁 (共通語) のどちら (または両方) を使うかを尋ねたアンケートの結果を示す。概して家族や友人と話すうちまたは私的な場面 (A/B/C)

では関西弁、ソトまたは公的な場面（D/E/F）では共通語という使い分け意識が働いていると言える。しかし、EやFのように共通語が期待される場面でも関西弁を選択した人が半数を超えており、公的な場面における共通語への切り換えは十分とはいえない。Dのみんなの前でプレゼンをするアカデミックな場面では、共通語の選択が半数を超えている。

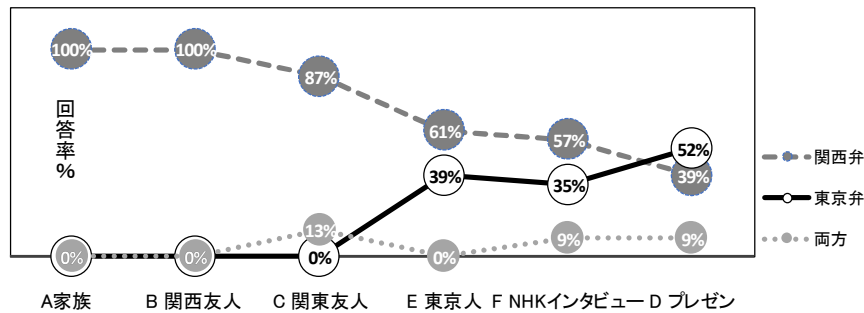


図 3: 言語意識に関するアンケート

### 3.3. コーホートの無声化生起率

図 4 に本稿の結果（2016 年度調査）と、10 年前に同じく 1990 年代生まれの大阪・兵庫出身の話者 23 名を対象に行った調査の結果（2006 年度調査）を示す。2006 年度調査の発話資料（邊 2010, 2012）は、共通語アクセントを基準にしている。また、発話の際の指示文には「1 つずつ区切って、ふつうの速さで、いつも言うように、自然に読んでください。」とあるが、どちらかと言えば、共通語で読まれた可能性があり、本稿とは調査方法で多少違いがある。平均無声化生起率は、2006 年度調査が 42%，2016 年度調査が 41% で、有意差は認められない ( $t(44)=1.23, p=0.2254$ )。同一コーホート（1990 年代生まれ）の無声化生起率は 10 年の歳月が経ても有意な差は見られず、無声化生起率は維持されていると言える。

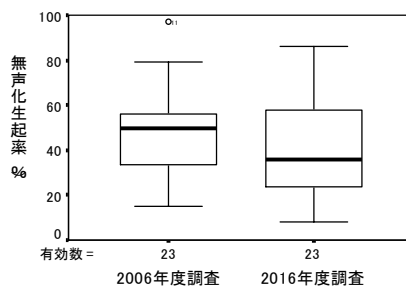


図 4: コーホートの無声化生起率

## 4. まとめと考察

1990 年代に大阪・兵庫に生まれ、その後も同地で過ごした近畿方言の母語話者 23 名を対象に、母音の無声化について、方言と共通語とでどの程度の差があるか検討した。加えて、言語意識の知るために特定の場面で関西弁と東京弁（共通語）のどちらを使うか尋ねるアンケートを実施した。さらに、本稿の結果と 10 年前にほぼ同様の方法で得た結果を比較し、同一コーホート（1990 年代生まれ）の無声化生起率に差があるかを調べた。

平均無声化生起率は、単独発話（方言）が41%、文章（共通語）が86%で、共通語で発話した場合は方言の場合に比べて無声化生起率が有意に高い。朗読用の文章には文末に「デス、マス、シタ」が16回出現しているが、これら3語の無声化生起率は100%、これら3語を除いた場合でも78%である。邊（2010）によれば、従来無声化が目立つとされる地域の無声化生起率は平均60%以上、東京方言のように無声化が規則的に起こるとされる地域の無声化生起率が平均80%以上で、今回の話者グループは、無声化生起率に関して、共通語能力をほぼ獲得していると言える。

言語意識に関しては、家族や友人と話す私的な場面ではほとんどが関西弁を好むが、知らない人から東京弁で声をかけられる、NHKに出演しインタビューを受けるといった公的な場面においても半数以上の人は関西弁を好んでいる。ただし、みんなの前でプレゼンをする場合は半数以上が東京弁（共通語）を選択しており、アカデミックな場面では書き言葉のように共通語意識が強く働くようである。

上記の無声化生起率と言語意識に関する結果を総合すると、今回の話者グループは、無声化に関して、共通語は話せるが、意図して話さないという状況が浮かび上がってくる。

さて、1990年代コーホートの無声化生起率は、10年の歳月を経ても有意な差は見られず、近畿方言の若者に見られる無声化生起率の増加は通時的変化と見られる。この結果を言語変化のS字カーブモデルに当てはめれば、共通語の場面では今後も無声化生起率が増加することが予想されるが、その一方で、意図的に共通語を使用しない意識が強まれば、無声化生起率の増加は見込めない。近畿方言の若者の無声化生起率が音調に左右されるのは明らかに共通語の影響であり、従来の近畿方言の無声化には見られない特徴である。共通語化、言語意識と関連して、近畿方言の無声化については、今後もその動向が注目される。

## 謝辞

音声収録の際にご協力くださった話者の皆さま、録音場所や話者のリクルート等にご尽力くださった神戸大学の林良子先生に深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 杉藤美代子（1988）「日本の8都市における母音の無声化」『大阪樟蔭女子大学論集』25, 1-10.
- 邊姫京（2010）「5地域に見る無声化生起率の年齢的变化」『日本語の研究』6(4), 79-94.
- 邊姫京（2011）「京阪神における狭母音の無声化」『音声研究』15(2), 23-37.
- 邊姫京（2012）「日本語狭母音の無声化—共通語普及の指標として—」博士学位論文、東京大学.
- 藤本雅子・桐谷滋（2003）「東京方言と近畿方言における無声化の比較」『音声研究』7(1), 58-69.
- 安田麗・林良子（2011）「日本語学習者における母音無声化—台湾人日本語学習者、東京、近畿方言話者を対象に—」『音声研究』15(2), 1-10.